

まえがき

この本はこの世界に現れた新しい社会集団、発生途上の階級についての本だ。そこでは、次の五つの問いに答えていく。それは何か。何が問題なのか。なぜ増えているのか。それは誰のことか。プレカリアートというその階級はどこで私たちの社会全体に関係するのか。

最後の問いが決定的に重要だ。プレカリアートのことが理解されないなら、社会は地獄に至る政治に引きずり込まれる危険がある。それは単なる予測ではない。ぞっとするが十分にあり得る可能性なのだ。それを防ぐ方法はただ一つ。プレカリアートが階級として自分たちを意識し、自分たちの立場をわかりやすく主張する代弁者を見出すこと。そして、政治家を動かし、半政府機関だと揶揄されることが多くなったさまざまな非政府機関（NGO）を含めて、遠回しに「市民社会」と呼ばれる人々を動かして、ちょっぴりユートピア的な課題と戦略を採用させ、新しい「極楽に至る政治」を創り出す力をもつようになることだ。

世界のプレカリアートを目覚めさせる必要は、緊急だ。世界各地でたくさんの怒りと不安が渦巻いている。この本では、プレカリアートが世界を自由なものへと解放する側面よりも、世界の犠牲者になる側面に焦点を当てる。しかし、プレカリアートを、純粹に苦しむだけの人々と見るのは間違っていると、最初に言っておきたい。プレカリアートの境遇に引きずり込まれた人々の多くは、20世紀の労働中心主義（レイバリズム）によって産業社会で提供されたものよりも、幾分ましなものを求めている。そんなプレカリアートが、犠牲者ではなく英雄だとは、もはや言えないかもしれない。しかし今では、プレカリアートが、21世紀を良い社会にする先駆者であり得ることが、明らかになり始めている。

それには次のような事情がある。プレカリアートの数はだんだん増えてきたが、2008年の金融危機によってグローバル化の隠された現実が明るみに出された。散々引き伸ばされたあげく、世界的な調整が実現し、あたかも高所得国か

ら低所得国に所得が移転されたかのように、高所得国の所得が引き下げられた。過去20年間、ほとんどの政府が意図的に無視してきた所得の不平等が抜本的に是正されなければ、そのような所得引下げの痛みと反響は爆発的になるかもしれない。グローバルな市場経済によって、いつかは、世界中の生活水準が向上するかもしれない。それは、グローバル化の批判者さえも、望むことだ。しかし確かなことは、グローバル化によって幾百千万もの人々が経済的に不安定になることをグローバル化のイデオロギーに凝り固まった人たち以外は、誰も否定できないことだ。そのようなグローバル化の荒波の最前線にいるのが、プレカリアートだ。しかしプレカリアートが直面する課題を前面に押し出す声は、まだあがっていない。プレカリアートは、「搾り取られる中産階級」でも、「下層階級」でも、「労働者階級下層」でもない。プレカリアートの境遇には、それらとははっきり異なった一連の不安定さがある。したがってまた、それらとははっきりと異なる一連の要求が生まれてくる。

この本を書いていた最初の段階で、大部分は年配の社会民主主義的な学者たちを相手に報告をする機会があった。ほとんどの人は私の考えを嘲笑し、新しいものは何もないと言う。そんな人たちにしてみれば、今の事態への答えは、昔とまったく同じだ。とにかくもっと仕事が必要だ、しかもまともな仕事が、と。尊敬すべきこんな学者たちに言いたい。そんな答えでは、プレカリアートは動かされないと。

この本に書かれた考えは、多くの人々に助けられてできあがった。だから、1人ひとりの名前を挙げて感謝しきれない。それでも、この本を書いている間に私が訪問した16ヶ国で、この本のテーマに関する私の報告を聞いてくれた多くの学生や活動家の人々に対して感謝したい。この本の文章には、それらの人々の洞察や質問が透けて見えるだろう。そもそもこのような本の著者は、人々の考えを伝えているにすぎないのだ。

2010年11月

ガイ・スタンディング